

野木町長
眞瀬宏子

誰もが誰かの役に立つ存在に

6月末に関東町村会海外行政調査で、オランダ、ベルギーを訪問してきました。

オランダは、国土の約60パーセントが海抜ゼロよりマイナスの国で、海岸線の強靱な防潮堤と水門の厳重な管理の下で暮らしていることに、まず驚きました。山がなく平坦な地形は野木町と同じでしたが、土を掘り起こして高台を作り、そこに住む家を建てていった国の歴史を考えると、飛行機から見えた数多くのため池や湖は、掘った穴に水がたまった結果と分かり、たゆまぬ努力で国が出来上がったことがわかりました。海外への植民地開拓や鎖国時の日本へのアプローチなど、国土拡張への思いは強かったのでしょうか。医療でのカルテやメス、またケンケン、オテンバなどのオランダ語が日本に多く残っているのも、深い縁を感じます。何か懐かしく故郷に触れるように感じた。

ベルギーはオランダからの独立国で、九州程の小さな国ですがオランダ語、フランス語、ドイツ語の3つ、どれもが公用語でそれぞれの民族がともに誇りをもって緩やかに連携を図りながら暮らしている国です。しかしサッカーの試合でもお分かりのよう

にイザという時には強烈に団結します。滞在時には日本との試合前で、赤いTシャツ軍団が大勢で氣勢を上げていました。

福祉部門では、オランダの「ケアファーム」を見てきましたが、全体としては、認知症、高齢者介護、障がい者等と分けるのではなく、ゆったりと包括的に受け入れていました。各利用者には仕事や役目を担ってもらい、働く場を提供する形で、国の補助が得られるということでした。しかし、決して生産性は期待していないので、一日ゆつくり好きな行動をとってもいいことにもなっていました。ポニーの係の方は進んでポニーを一生懸命ブラッシングしていましたし、牛の係は私に世話の仕方を見せて、やってみるように勧めるので恐る恐る試みました。

みんなの顔は優しく本当に幸せそうだったことを忘れることはできません。誰もがどこかに能力を備えており、何か役に立つことができる存在であるからこそ、喜びであると思いました。

一人ひとりがそれぞれ自分らしく生きる素晴らしさを感じてまいりました。

【オランダのケアファームにて】



ポニーの係は進んで自らブラッシング



牛に餌をやるとうとする私

誰もが心豊かに暮らせる社会の実現を目指して
人権学習シリーズ②

◆◆◆ヘイトスピーチについて◆◆◆

毎回多くの感動を与えてくれるオリンピック・パラリンピックが、2年後の2020年に東京で開催されます。この開催に伴い、外国人と接する機会がますます増えることでしょう。

しかし、近年特定の人種や民族、宗教などの少数者の差別につながるヘイトスピーチと呼ばれる言動が社会問題になっています。ヘイトスピーチの内容としては、「日本から出て行け」「叩き出せ」といった脅迫的なもの、昆虫や動物などに例える著しい侮辱などが挙げられます。これらの言動は、差別意識を助長し、人としての尊厳を傷つけるもので、決して許されるものではありません。

この差別的言動の解消を目指して、平成28年にヘイトスピーチ解消法(※)が施行されました。この法律に基づき、地方公共団体では、啓発・教育活動を進めており、学生団体やボランティア組織等でも、ヘイトスピーチをなくすための活動が盛んに行われています。

ヘイトスピーチを根絶するためには、私たち一人一人がそれぞれの国の文化や宗教、生活習慣などを正しく理解し、尊重していくことが大切です。

(※) 正式名称: 本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律

問生活環境課(57)4132

